

令和元年6月20日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02487

研究課題名(和文) アンチ・エレジーが果たす役割：アメリカの詩人パーマーの作品と現代社会

研究課題名(英文) The Anti-Elegy's Function: Michael Palmer and Contemporary American Society

研究代表者

山内 功一郎 (YAMAUCHI, KOICHIRO)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20313918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、アメリカの詩人マイケル・パーマーの作品において「アンチ・エレジー」的な要素がどのように作用しているかを解明した点にある。アンチ・エレジーは単純にエレジーという文学的模式自体を消去するのではなく、むしろそれを「進化させ、異種交配させ、自己破壊させる」ために機能する。本研究はまずこの点に着目し、パーマーの作品におけるエレジー的な要素とアンチ・エレジー的な要素の競合について分析した。その結果、詩には現代社会の悲劇を一掃する力はないが、同時代の読者各々の意識における肯定性と否定性のバランスを復活させる言語固有の機能は確かにあることが証明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、これまでほとんどお互いから断絶していたパーマー作品の研究とアンチ・エレジーの研究の間に連関するテーマを見出し、分析を行った点にある。その結果、エレジーとアンチ・エレジーの競合を示すパーマー作品が、現代社会において過小評価されがちな「言語」の真価を読者に指し示す機能を持っていることが判明した。これはまずアカデミズムにおけるアメリカ文学研究の成果であるが、それと同時にアカデミズムの外部にとっても有益な社会的意義を有する。なぜならばそれは、パラドックスを通じて「言語」の実相に迫る試みが、詩の読者各々によって実践可能であることも証明したからである。

研究成果の概要(英文)： The achievement of this study is that it has elucidated how "anti-elegiac" elements work in the works of American poet Michael Palmer. Anti-elegy does not simply eliminate the literary mode itself of elegy, but rather functions to "evolve, cross-hybridize, and self-destruct" it. Focusing on that point, this study has analyzed the paradoxical contention between the elegiac and the anti-elegiac in Palmer's works. As a result, it has become clear that although poetry does not have the power to wipe out the tragic events in our time, it certainly works to resuscitate the power of language, which establishes the balance between positivity and negativity in our mind.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：アメリカ 詩 エレジー 文学

1. 研究開始当初の背景

マイケル・パーマーの作品における「アンチ・エレジー」的な要素に着目することになったのは、アメリカを始めとする英語圏の近現代詩研究を進める際に、この要素が極めて重要な問題を示しているからである。Maera Shreiber が指摘しているように、喪失から慰撫へと至る治癒的な過程がプログラムされていた古典的エレジーは、第一次世界大戦を始めとする大量殺戮が遂行された 20 世紀前半において決定的に失効してしまった。その結果、かつては当然のごとく共同体によって承認されていたエレジー成立の基本要件（宗教的な救済の祈願、死者が生前に具現していた美質の列挙、死者と再生する植物神の同一視等）に対しても、現代詩人たちによる仮借のない嫌疑が突きつけられることになったのである。ただしその反面、実はアンチ・エレジー的な要素は単純にエレジーという文学的模式自体を消去してしまうのではなく、むしろそれを「進化させ、異種交配させ、自己破壊させる」ために機能する。したがって、近代以降の詩人がまがりなりにもエレジーらしき作品を手掛けるとすれば、それは必然的に古典的エレジーとアンチ・エレジーの激しい相克を内包せざるをえないわけである。近年では R. Clifton Spargo 等も上述のような理論を援用し、現代詩や現代美術においてアンチ・エレジーが果たす機能をめぐる考察を試みている。また 2015 年に刊行された *Poetry and Its Others* において、Jahan Ramazani はごくわずかではあるがパーマーの作品に触れ、そのアンチ・エレジー的な特徴に対する注意を促している。

しかしながら、パーマー作品におけるアンチ・エレジー的な要素とその機能については、まだアメリカ本国でも萌芽的な研究しか進展していない。これは、パーマー研究とエレジー研究のそれぞれが着実に層の厚みを増しているにもかかわらず、これら二つの領域を結ぶ視座に立つ研究がまだ行われていないことを意味している。このような欠損に起因する弊害をわずかなりとも是正するために、研究代表者の山内はまず 2015 年に研究書『マイケル・パーマー オルタナティブなヴィジョンを求めて』（全 279 頁）を思潮社から発表し、自ら研究の土台を用意した。そして上述の研究目的を設定したのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の問題を解き明かすことである。「アメリカの詩人マイケル・パーマーの作品は、「アンチ・エレジー」的な性格をどのように具体化し、同時代の社会に対して担うべき役割を果たしているか」。マイケル・パーマー（1943 年生。元全米詩人協会理事）は、アメリカの詩人・批評家として、現在もっとも注目を集めている大家である。近年の研究の進展によって、そのパーマーの作品が、アンチ・エレジー特有のパラドックスを内包していることが少しずつ判明し始めている。そこで山内は、パーマーの作品がどのようにこの性格を活用し、同時代の社会に貢献しているかという点をさらに解明する研究目的を設定するに至った。

3. 研究の方法

研究代表者の山内は、マイケル・パーマーの全面的な協力を得つつ研究を進めた。パーマーはいわゆる研究分担者ではないが、研究対象となる作品に関する情報提供を行う研究協力者となった。したがって、本研究はすべて研究代表者である山内の計画と責任において進められた。

山内は単独で調査、論文作成、研究発表を行うほか、国内外のアメリカ文学者との交流を図りつつ研究を遂行した。パーマー研究とアンチ・エレジー研究の拠点は、それぞれヨーロッパとアメリカにあるので、現地で最前線における動静を把握し研究内容の充実を図った。

なお研究は、基本的に次のような流れに沿って遂行された。まず 2016 年度には、マイケル・パーマーとアメリカ社会に関する先行研究を整理しながら本研究に役立つものを抽出し、どのように活用するか検討した。そしてパリに渡り、同地在住のアメリカ人の画家アーヴィング・ペトリンを始めとする芸術家・批評家へのインタビューを行った。とりわけペトリンは長年にわたりパーマーと親交を結び共作を行った画家なので、インタビューを行うことによりパーマーとアンチ・エレジーの概念を考察する上で貴重な情報を得ることができた。また研究初年度ではあるが、十分な時間をかけて入念な成果論文を作成するために、この段階でパーマーとアメリカに関する論文草稿の作成に着手した。

二年目にあたる 2017 年度にはカリフォルニアに渡り、パーマーや彼のアンチ・エレジーの実践を高く評価する研究者へのインタビューを行った。また英米の近現代詩研究の一大拠点として知られるカリフォルニア大学バークレー校へも赴き、アンチ・エレジーに関する体系的な文献調査を同大学付属図書館において行った。情報収集の対象は主にアメリカ文学関係の資料となったが、アメリカで入手可能な欧米社会や思想関係等の図書も、研究上有益なものは積極的に収集した。帰国後にカリフォルニアでのリサーチ結果を精査し、前年度に行ったアメリカでのリサーチ結果と照らし合わせながら研究成果の文書化を進めた。この作業が順調に進んだ結果、研究計画の二年目となるこの年の 12 月に、単著の研究書『沈黙と沈黙のあいだ ジェス、パーマー、ペトリンの世界へ』（思潮社、全 231 頁）を出版することができた。

そして最終年度となる 2018 年度には、引き続きカリフォルニアにおけるリサーチを行った。またさらに、本研究テーマに関する口頭発表を行った。発表題目名は次の通りである。「Who will count, who will claim?」 Michael Palmer の近作におけるアンチ・エレジーの展開。この口頭発表は、2018 年 6 月 21 日に静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会の例会において行われた。発表者は山内本人である。山内はアンチ・エレジーとパーマーの詩作をめぐる研究

テーマについて包括的な発表を行った。そして現代社会におけるエレジーの可能性と不可能性を問うパーマーの作品が、直接的なプロパガンダへは還元されない言語の潜勢力を喚起することを解き明かした。特に静岡大学人文社会科学部の翻訳文化研究会という言語文化の専門分野に精通した研究者の集う場で、上記のような発表と質疑応答を行えたことは、本研究にとって極めて有意義だった。

4. 研究成果

もっとも包括的な研究成果は、2017年12月に単著の研究書『沈黙と沈黙のあいだ ジェス、パーマー、ペトリンの世界へ』(思潮社、全231頁)を出版できたことである。入念な現地調査の結果を反映した本書は、どのように現代詩人や画家の作品が社会情勢や思想哲学と対話的な関係を生み出しているかという点について論じた研究書である。パーマーの作品も集中的に考察しているこの一冊は、本研究のテーマをめぐる考察とも密接な関係性を示している。なお、本研究書はアカデミズムの内部はもとより、外部の広い読者層からの反響を得た。新聞・雑誌に掲載された本書の書評、または本書を含む新刊詩書をめぐるエッセイを若干挙げておけば、次のとおりである。

2018年1月23日発行の『毎日新聞』に掲載された、和合亮一によるエッセイ「詩の橋を渡って」。

2018年4月1日発行の『現代詩手帖』に掲載された、佐峰存による書評「表現の源にて」。

2018年12月1日発行の『現代詩手帖』に掲載された、佐峰存によるエッセイ「呼吸の歌を聴く」。

上記のように読者のだれもが容易に手に取ることのできる媒体に拙著が紹介されたことは、本研究の成果を広く一般の方々に伝えるうえで、極めて効果的であったと考えられる。

他方、論文の主たる成果としては、2018年3月に論文「到来する言葉たち マイケル・パーマーによる「アンチ・エレジー」の実践」を『現代詩手帖』(思潮社)誌上に発表した件が挙げられる。この論文は、パーマーの最新作においていかに旧来的なエレジーの構造が批判的に検証され、さらにアンチ・エレジー的な批評性が提示されているかといった点を論じたものである。近年の英文学研究の動向にも触れつつ、欧州難民危機と詩の関係性について分析したこの論文は、本研究の成果を直接的に示している。またそういった成果を現代詩の専門誌『現代詩手帖』誌上で発表できたことは、研究成果を一般に広く公開する点において極めて有効だった。

その他の研究成果としては、2016年10月にパーマー論「この時代の闇の中で マイケル・パーマーの近作について」を文芸誌『三田文学』誌上に発表できた件を挙げることができる。この論考は、パーマーの作品において焦点があてられる「サイレンス」が古典的なエレジーの保守性を打ち破り、さらにエレジーの概念自体まで更新し改変するアンチ・エレジー特有の性格を示していることを解明した。また2017年3月には、アメリカの詩人フィリップ・ラマンティアについての査読論文「『冒険におけるシュルレアリスト』の誕生 フィリップ・ラマンティアの少年時代と初期詩篇について」を研究誌『シルフェ』誌上に発表できた。カリフォルニアの詩人ラマンティアはパーマーの先行世代に属する存在なので、両詩人を対照的に捉える視座を確立するためにも、この論文を発表できたことは有益だった。

なお、関連する成果としては、次の書評も上げることができる。「ノックする黒い波 小池昌代著『赤牛と質量』」。掲載誌は思潮社の発行する月刊詩誌『現代詩手帖』第61巻第12号、発行年月は2018年12月である。題名から察せられるように、山内は日本の現代詩人小池昌代の詩集『赤牛と質量』をめぐる書評を発表した。詩集に通底する水のイメージを抽出したうえで「本源的な生命力」の到来について指摘したこの書評は、言語の本源的な能力について分析した本研究の応用例となった。こういった形で研究成果の具体的展開を示すことができた点もまた、非常に有意義だったと考えられる。

詩には現代社会の悲劇的な側面を一掃する機能はないが、読者各々の意識における肯定性と否定性のバランスを復活する言語本来の力を発動させる作用がある。総じていえば、本研究の成果はこの点を実証的に証明した点にあると要約できるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

山内功一郎、「到来する言葉たち マイケル・パーマーによる「アンチ・エレジー」の実践」、『現代詩手帖』、第61巻第3号、査読無、2018、46-52

山内功一郎、「廃墟の行方 『デジャヴウ街道』を歩みながら(特集 野村喜和夫と現在)」、『現代詩手帖』、第60巻第4号、査読無、2017、87-89

山内功一郎、「『冒険におけるシュルレアリスト』の誕生 フィリップ・ラマンティアの少年時代と初期詩篇について」、『シルフェ』、第56号、査読有、2017、49-69

山内功一郎、「この時代の闇のなかで マイケル・パーマーの近作について」、『三田文学』、第95巻第127号、査読無、2016、322-326

〔学会発表〕(計2件)

山内功一郎、「“Who will count, who will claim?” Michael Palmer の近作における「アンチ・エレジー」の展開」、静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会例会、2018年6月21日、静岡大学(静岡市)

山内功一郎、「少年詩人の誕生 Philip Lamantia の初期詩篇を読む」、日本アメリカ文学会東京支部例会、2016年1月30日、慶應義塾大学(東京都港区)

〔図書〕(計3件)

山内功一郎 他、春風社、『翻訳とアダプテーションの倫理』、2019、428(277-297)

山内功一郎 他、金星堂、『ノンフィクションの英米文学』、2018、432(338-354)

山内功一郎、思潮社、『沈黙と沈黙のあいだ ジェス、パーマーとペトリンの世界へ』、2017、1-231

〔その他〕(計3件)

山内功一郎、(書評)「ノックする黒い波 小池昌代著『赤牛と質量』」、『現代詩手帖』、第61巻第12号、査読無、2018、93-93

山内功一郎、(翻訳)アンドレア・チェッリ著「翻訳における愛 イスラーム=スペインが生んだアラビア語の恋愛論『鳩の首飾り』の現代スペイン語訳」、『翻訳の文化/文化の翻訳』第13号、査読無、2018、151-160

山内功一郎、(報告)「ブラックホールと光源体 西脇順三郎アンバルワリア祭」、『現代詩手帖』、第59巻第4号、査読無、2016、87-87

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：マイケル パーマー

ローマ字氏名：(Michael PALMER)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。